

パンタナール通信

南北米福地開発協会 会報 2005年5月1日発行 第20号



田岡駐日パラグアイ特命全権大使を迎えての講演会
渋谷フォーラム8にて(4月24日)

田岡功駐日パラグアイ全権大使講演要旨文

一九五八年日本政府の奨励で、農業移住者として、父親と共に十四歳で二月の船旅をしてパラグアイに着いた。多分、父親は五十町歩(一町=三〇〇〇坪)の大地主になれるということで、戦後の荒廃した日本を出て、一旗揚げようという気持ちだったと思う。しかし、着いた所はジャングルだった。未開の地の開拓は大変に困難が伴ったが、父は「日本人としての誇りを持って!」とよく言われた。二十五歳で結婚、その半年後に父が亡くなってしまった。パラグアイの人々は分かち合う暖かい心を持っている。私は徳島で生まれ育ったが、戦後の貧しい日本でも、隣のおばさんがトウモロコシを焼いて、幾つかに切って、自分の子と同じように分けてくれたのを覚えている。

開拓から日本人移住地を中心にラパス市として育てながら、そこで一八年間、市長をしてきたが、昨年、大統領から日本大使の要請を受け、国会も満場一致で承認してくれた。それは日本人田岡としての評価を受けたのだ。パラグアイと日本の架け橋をどの様にやるかという時、日本に来て皆様の様に既に実践している支援団体があることを知って本当に嬉しく、心から感謝申し上げます。

日本は食糧の六〇%以上を外国から輸入していますが、中国もそう遠くなく、日本への輸出が出来なくなります。そうなると日本は南米への関心も高まって来ると確信します。国民同様に分け隔てなく移住者を受け入れてくれたパラグアイに恩返しをしたいと日本政府に訴え、パラグアイへ凍結していた三五〇億円、四年間融資等を了承してくれました。日本の皆様に感謝します。パラグアイはまだまだ教科書やノートも買えない貧しい人たちが沢山居ますが、日本人を信頼し、親しく迎える心の温かさはあります。

移住地で半世紀、日本人として持つて来た誇りが、帰国してみると失われていることに日本の将来を心配します。他人に無関心な、労りのない若者をどう転換させていくか、パラグアイの大自然の中に連れて来て、日本を振り返る時、大きく変革してくれるのではないかと。メルコスールと共に観光にも力をいれ始めましたので、沢山の人が訪れて下さることを期待しています。

(文責：飯野)

五月予定

二日研修会(事務局にて)

五月二十一日 二十二日

南北米福地開発協会事務局

神奈川県川崎市溝の口三

十一 十五
岩崎ビル四階

電話

ファックス

〇四四一八二九 二八二一

〇四四一八二九 二八二〇

講演後の質疑応答

質問「パラグアイ人の国民気質は？」

大使「パラグアイは大半がスペイン人との混血。純パラグアイ人で中流前後の家庭では奥さんは財布をにぎることはありません。旦那さんが財布を握り、買い物に行く時は通常、夫婦で行き、奥さんが求めた物を旦那さんが財布を出して、お金を払いお釣りも旦那さんが管理する。ドイツ系の方も多く居ますがドイツから移住したというより、ブラジルに移住したその子孫がパラグアイに移住してくる。ドイツ系は自分で鶏、牛を飼いで自分で自活する体制を整え、生活力がある。しかし、パラグアイ人の傾向として、毎日その日、暮らして、自活する能力が欠けている傾向がある。それは教育が不十分であるからかもしれない。今日、腹いっぱい食べきれないほど食べ、次の日に食料がなければマテ茶で朝も昼もすくすくすることもある。しかし、土地を何百、何千町歩持ち、牛を何千頭、何万頭飼う牧場の大金持ちはブライドが高く、現地の働く人を決して家に入れたりはいらない。とても厳しく、人夫として扱い差別待遇をする。移住地では日本人の場合、誰であっても、家に上げ、温かく迎えるのが通常である。」

「もう一つの日本が外国に在るのです。という言葉が強く胸に響きました。昔の良き古き日本人の心が外国にこそあるのだなあと改めて思い知らされました。田岡大使の素晴らしい人柄にも触れる事ができ大変良かったです。これから大使にはパラグアイの良さを力説していただき、少しでも今の日本の精神が浄化されれば良いのではないかと思います。最後に田岡大使、がんばってください。(飯田)」

徳島県三野町に生まれ、十四歳でパラグアイへ移住されご苦労されてきた中で今の日本人が忘れてきている大和魂、日本人の心を大使のお話から新たに呼び起こされました。戦後の経済発展の豊かさの陰で荒廃していく本来の日本人としての愛国心、日本人としての誇り、今、自然を大切に地球環境を守っていくことと平行して子孫に伝え続けていきたいと思う。(浅井)



会員の質問に応えられる田岡大使。



レダ近郊の最近の自然



新しい厩舎と牧童達の宿舍の完成 (2005年3月)

新しい厩舎(馬小屋)がすてきです。馬の部屋には香りいっぱい干草がしかれ、馬たちはもうずっと昔からそこに住み着いているかのように、落ち着いた顔をしています。行くと、顔を出してやさしい目で見返してくれます。これからは馬小屋に行くのが楽しみになります。今、厩舎の東側にアランプレを張り、馬場を作っています。皆様がレダにおいていただけるように乗っていただくことができますようになります。(小田記)

